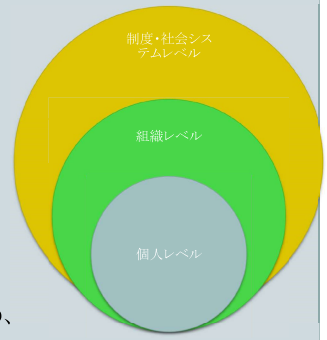
「都市環境イノベーションと社会的受容性：持続可能な地方都市とは何か？」コメント

環境経済・政策学会
2016年9月11日

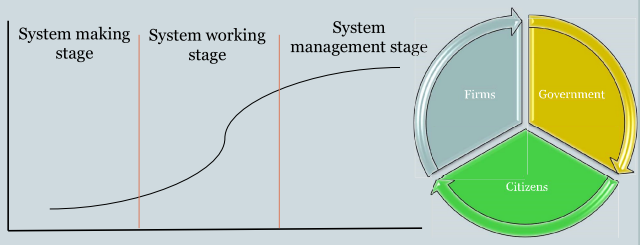
静岡県立大学
島田　剛

研究の位置付け

1) 技術協力
2) キャパシティ・ビルディング（Capacity Building）: Berg, Elliot. 1993. Rethinking technical cooperation: reforms for capacity building in Africa. New York, N.Y: United Nations Development Program.
3) キャパシティ・ディベロップメント（Capacity Development）: (JICA 2006)
4) 社会関係資本（諸富徹, 2010、地域再生の新戦略）



Social Capacity for Environmental Management



(Source: modified base on Matsuoka 2007))

共同ガバナンスと社会的受容性

今回の研究はSocial Capacityの強化（環境Innovationを生むための）のプロセスに関する研究と位置付けられる。

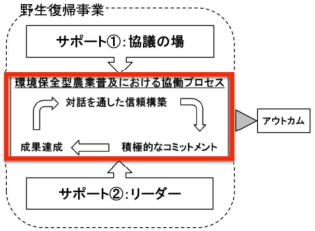


図１　協働ガバナンスのモデル図

（岩田　2016）

全報告への共通コメント

1. 「協議の場」＝定期的な会合の開催＋マルチアクターの巻き込み（**定期的な会合だけだと形式的な部分を過大評価することになるのでは？**）
2. リーダー（**市外アクターの役割は？**）
3. 多様なパスがあるのでは？
   - 例えば、徳島県上勝町の「いろどり」の取り組み。定期的な会合はなく、市外から来たアクターの役割（横石知二氏のアイデアと力）。多くのJOCVの事例。
   - 自分達のものと思えるかどうか（Ownership）が鍵かも。

ゲーム理論の「囚人のジレンマ」から協働へ

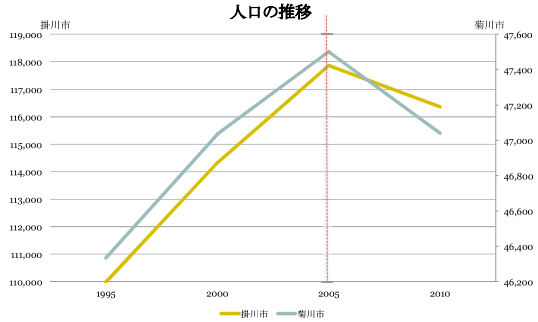
- 多様なパスがありうるが、タダ乗りするよりも協働が可能な社会への設計が重要。
- そういう意味では「受容性」という言葉が少しミスリーディングな可能性も。
- さらに集積することによる外部性効果（アルフレッド・マーシャル 1920）を狙う（飯田市の事例）。

【飯田市報告へのコメント】

- 飯田市の事例では中小企業以外の行政・市民の動きは良く分からない。リーダーの役割の重視？

Aさん＼Bさん	協働	協働しない（タダ乗り）
協働	(10, 10)	(5, 15)
協働しない（タダ乗り）	(15, 5)	(0, 0)

掛川モデル：人口減少社会の中でのモデルになり得るか？ゴミ処理場の処理能力がこれまでほど危機的になることは少なくなるかもしれない。



豊岡と佐渡の比較について

表１　コウノトリ米とトキ米の作付面積の推移と無農薬米の割合

		2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
豊岡市	「コウノトリ米」無農薬	44.1	61.9	57.3	47.8	50.4	51.4	60.4	89.1
	「コウノトリ米」減農薬	139.0	150.4	162.2	186.3	201.2	218.3	232.3	240.2
	合計(ha)	183.1	212.3	219.5	234.1	251.6	269.7	292.7	329.3
	無農薬米の割合(%)	24.1	29.2	26.2	20.5	20.1	19.1	20.7	27.1
佐渡市	「トキ米」無農薬	8.3	12.7	11.6	14.3	16.1	16.6	16.8	19.0
	「トキ米」減農薬	418.5	850.1	1,176.7	1,293.5	1,350.9	1,317.5	1,198.0	1,197.4
	合計(ha)	426.8	862.8	1,188.3	1,307.8	1,367.0	1,334.1	1,214.8	1,215.4
	無農薬米の割合(%)	2.0	1.5	1.0	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5

- 割合（%）で見るか、合計haで見るか（実際の面積は佐渡市の方がずっと大きい）
- 伸び率（2008→2015）は豊岡市79.85%に対し、佐渡市184.77%。